

戦前の地方農村青年をとりまく思想的・社会的状況について

What did the Youths Living in Countryside Think in Pre-WWII
Ideological and Social Circumstances?

今井 雅之

IMAI Masayuki

要 旨

昭和戦前期、様々な立場の人間がアチック・ミュージアムに関わったが、その中には地方農村青年として括ることのできる人々がいた。北海道幌別の佐藤三次郎、秋田男鹿の吉田三郎、越後三面の丹田二郎、安芸三津の進藤松司、喜界島の拵嘉一郎などがその一例である。彼らは地元の生活を詳細に記録し、その成果はアチックの彙報という形で出版された。これらは現在、昭和戦前期の生活を知るための貴重な民俗記録として位置づけられている。

しかし、これらの記録がどのような時代状況の下でなされ、その当時どのような意味をもったのかという点については、これまで十分に論じられてこなかった。そこで本稿では、地方農村青年の一人、吉田三郎の活動遍歴を起点として、戦前の地方農村青年をとりまいていた思想的・社会的状況について整理し、この問題を考えるための糸口としてみたい。

吉田三郎は1905年（明治38年）生まれ。1935年（昭和10年）、29歳の時に『男鹿寒風山麓農民手記』を脱稿し、その後渋沢敬三に招かれ保谷の民族学博物館管理人となった。彼が一地方の農村青年として過ごした大正から昭和初期という時代はデモクラシーの風潮のもと、数多くの社会的・思想的立場が乱立した時代であった。地方農村青年はこうした状況をどのように受け止めたのか。吉田三郎を起点とした場合、以下のキーワードが浮かび上がってくる。

「老農主義の精神」「婦農思想」「農民自治主義」「農村塾風教育とデンマーク農業」「小作争議」「生活綴方運動」「農村教育研究会と郷土調査」「博物館」

吉田三郎はこれらの立場を自由に組み合わせ、自らの生き方の指針とした。『男鹿寒風山麓農民手記』の執筆は、その実践の一つであったということになる。アチック・ミュージアムから出版された地方農村青年の生活記録は、こうした社会的・思想的立場との距離を測ることで同時代的な布置がみえてくるのではないだろうか。

【キーワード】 農村青年、生活記録、大正デモクラシー、農本主義、社会主義

1. はじめに

昭和前期、様々な立場の人間がアチック・ミュージアムに関わったが、その中には地方農村青年⁽¹⁾として括ることのできる人々がいた。北海道幌別の佐藤三次郎、秋田男鹿の吉田三郎、越後三面の丹田二郎、安芸三津の進藤松司、喜界島の拵嘉一郎などがその一例である。彼らは地元的生活を詳細に記録し、その成果はアチックの彙報という形で出版された。これらは現在、昭和前期の生活を知るための貴重な民俗記録として位置づけられている。しかし、これらの記録がどのような時代状況の下でなされ、その当時どのような意味をもったのかという点については、これまで十分に論じられてこなかった。そこで本稿では、地方農村青年の一人、吉田三郎の活動遍歴を起点として、戦前の地方農村青年をとりまいていた思想的・社会的状況について整理し、この問題を考えるための糸口としてみたい。

2. 吉田三郎の生涯

吉田の生涯は大きく三期に分けて整理することができる。秋田男鹿の富永大倉に暮らした戦前、東京保谷の民族学博物館管理人として働いた戦中、秋田追分西で戦後開拓に従事した戦後である。本章では各期の出来事について簡略に記すのみとし、思想的・社会的状況との関連については後段で個別に見てゆくこととする。

1) 戦前

吉田は1905年(明治38年)、秋田県南秋田郡脇本村富永大倉に七人兄弟の三男として生まれた(写真1)。富永大倉は男鹿半島の付け根、寒風山の東麓に広がる農村であり、吉田家も稲作を中心とする農業を営んでいた⁽²⁾。吉田も幼少期より稲作を手伝ったが、この時の苦勞⁽³⁾が後年畑作農家として独立する遠因となっている。



写真1 吉田三郎(吉田1935、扉写真)

吉田の幼少期、富永大倉の青少年は勉学に励む者が多く、彼らは夜になると村のお堂に集まり「夜学」と称する自主学習会をおこなっていた。その後、青年となった吉田はこれを発展させて「富永青年自治塾」と名付け、その中心人物として活動した。自治塾では日々の自主学習のほか、時には外部から講師を招き、農村青年としての生き方や社会思想について学んだ。

20代前半になると、吉田は自治塾の講師を介して当時最先端の社会思想家と接するようになる。その出会いは、自治塾講師、実業補習学校教諭の渡部英から、秋田市で帰農生活を送る社会思想家、鈴木木人の兄弟愛道場を紹介されたことに始まる。鈴木のもとを訪ねるうち東京の農村教育家、大西伍一が中心となって発行していた雑誌『あおぞら』を紹介される。これに感銘を受けた吉田は、武蔵野の大西宅で開催された農民自治会の夏期講習に参加した。この時教えを受けた社会思想家の中でも、特に岡本利吉の教えに共感し、岡本が

富士山麓に開校した農村青年共働学校に入学する。こうして中央の社会思想家と芋づる式に繋がっていくなかで自らの思想を形成し、その考えを新聞や雑誌など投稿するようになっていった。

20代後半になると、自らの思想を実践するため、そして三男として家から独立するため、実家の裏山に土地を借りて山居生活を始める。独立する前年には秋田県内の篤農家から半速成蔬菜栽培技術を学び、ナスやトマトといった畑作で生計を立てはじめた⁽⁴⁾。

山居生活が軌道に乗り始めた1933年（昭和8年）、武蔵野の夏期講習以来交流を続けていた大西が吉田のもとを訪ねてきた。吉田の口から語られる村の生活に興味をおぼえた大西は、これを記録として残すことを勧めた。吉田はすぐに実行して原稿を書き、大西に送ったところ、これが渋沢の目に留まり、『アチックミュージアム彙報第2 男鹿寒風山麓農民手記』（以後『手記』）としてアチックから出版される運びとなった。この出版祝賀会の場で吉田は、渋沢から直々に、より詳しい生活記録を執筆するよう依頼される。この依頼を受け、1935年（昭和10年）3月13日から1936年（昭和11年）3月12日まで、366日間の生活を詳細に記録したものが『アチックミュージアム彙報第16 男鹿寒風山農民日録』（以後『日録』）となった⁽⁵⁾。

戦前期、吉田は地方農村青年として農業に励むとともに、中央の思想家と交流しながら自らの生き方を模索していた。その過程で渋沢に見いだされ、生活記録の作者としてアチックの一員となっていったのである。

2) 戦中

『日録』を脱稿した吉田のもとに、渋沢から次のような手紙が届いた。

今度日本民族学会に附属して研究所を建てることになり（中略）守衛兼園丁兼小使が入用（中略）要するに小生は貴兄を煩わして之の民族研究所の縁の下の力持ちになってもらいたいと思ふのです
[渋沢1937、p.1-3]

つまり保谷の民族学博物館の管理人を依頼されたのである。吉田は、①子供を東京の学校で育てたい、②より広く学者に接し勉強したい、③国営の集団開拓農場を作る足掛かりとしたい、との思いからこれを承諾し、1937年（昭和12年）7月7日、一家揃って上京した⁽⁶⁾。奇しくもこの日は盧溝橋事件勃発の日であり、日本が本格的に戦争へと突入するきっかけとなった日と一致している。

管理人となった吉田は博物館の守衛室に住み込み、敷地内の畑を耕しつつ、研究所の所員である宮本馨太郎の下で民具整理に従事した（写真2）⁽⁷⁾。研究所では毎週、水曜会という名の集まりがあり、所員らは民具について議論し、昼食をともにしていたとされる⁽⁸⁾。

保谷へ移住してからの吉田は、より積極的にアチックへ関与していった。『アチックマンスリー』にもたびたび記事を投稿しており、その中には「所謂アゴについて」と題して内浦漁民史料に言及したものも存在している⁽⁹⁾。また、1941年（昭和16年）には、幼少期の水引きの苦労や村の出来事を喜劇的に描写した実録小説「我田引水」を短歌雑誌『博物』⁽¹⁰⁾に連載している。「所謂アゴについて」と「我田引水」は、網元と網子、地



写真2 保谷の民族学博物館にて（神奈川大学日本常民文化研究所所蔵 目録番号ア-115-21-2）

主と小作といった階級関係への言及がなされている点で特徴的である。

1942年（昭和17年）からは、日本農業研究所農場助手訓練生係、日本生活学院農場指導を兼務しながら活動の幅を広げ、また食糧難が本格化した1943年（昭和18年）には、渋沢邸庭園を開墾し自給畑にする指導を任されている。

戦中期の吉田は保谷の民族学博物館管理人として渋沢のもとで働きつつ、またアチック以外にも活動の場を広げながら、集団開拓農場の夢を実現する方法を模索していた。

3) 戦後

敗戦の色が濃くなり始めた1945年（昭和20年）7月、吉田は自らの思い描く夢の実現に向け、民族学博物館と日本農業研究所のそれぞれの雇い主、日銀総裁渋沢敬三、農商大臣石黒忠篤との三者会談に臨んだ。そこで吉田は、郷里秋田で畑作を中心に据えた共働農場を拓き、戦災孤児を集めて百姓道教育とその実地指導を行ないたい旨を申し入れ、快諾された。

同年10月、吉田は秋田県天王村追分西地区の30町歩を借り受け、兄弟親戚、内原訓練所残留組、天王修練農場訓練生から同志を募り、共働農場を拓いた（写真3）。当初吉田が理想とした、「二十戸或いは三十戸の農家が、全く同一な歩調のもとに共働経営をおこない、そしてより多くの百姓がこれにならって全国に普及するようになって見たい」〔吉田1963、p.122〕という理想はそのすべてが実現したわけではなかったものの⁽¹¹⁾、その後追分西は集落として発展し、現在に至っている。

吉田は1948年（昭和23年）以降、秋田県開拓者連盟初代委員長や秋田県開拓農業協同組合連合会理事等を兼務し、戦後日本の農業復興に寄与した。また晩年は『男鹿風土誌』、『男鹿方言民俗

誌』などを記すとともに、男鹿市文化財保護審議委員として活躍した。



写真3 追分西開拓地にて（個人蔵）

戦後の吉田は、自らに見出した使命を実現すべく開拓を主導し、またアチックの経験を生かして文化財行政にも携わった。なお、アチック関係者とは戦後も交流が途絶えることはなく、渋沢敬三、石黒忠篤、宮本馨太郎などは、たびたび追分西の開拓地を訪れている。

吉田は戦前・戦中・戦後と身を置いた場所は異なるが、いずれの時代、場所にあっても自らの生き方について思索を続け、実行に移した。現在も

追分西開拓地に建つ還暦記念碑には、吉田の思いが直截に表現されている。

数知れぬ 生命作りし この土に 五十年の力 投げて悔いなし

一九六四年 三郎 カツエ

3. 思想的・社会的状況

本稿の目的は、戦前の地方農村青年をとりまいていた思想的・社会的状況について整理することにある。前章で述べた通り、青年期の吉田は当時の思想的・社会的状況に敏感であり、大きな影響を受けていた。そのため、吉田の活動遍歴を起点としてこれを整理することで、地方農村青年に

とっての戦前が鮮明かつ具体的にみえてくると考える。そこで本章では、吉田が影響を受けたものを時系列に沿って紹介していきたい。

1) 老農の精神

吉田三郎は幼少期、村のお堂に集まり夜学をおこない、青年期には富永青年自治塾の中心人物として自主学習に励んだが、そこで学んだものの一つが秋田の老農、石川理紀之助の生き方であった。石川理紀之助（1845-1915）は明治期に活躍した秋田の代表的な老農であり、その生涯を農村の更生に捧げた人物である。吉田が生涯目標とした人物であり、その率先垂範の態度や山居生活は石川に影響を受けている。

率先垂範の態度とは、石川の有名な訓言「寝て居て人を起こすこと勿れ」に象徴されるもので、理想を説くだけでなく、自らが手本となって実行する態度を言う。青年吉田は当初、老農主義と仏教哲学に詳しい村の先輩の学説を有り難く聴いていたが、次第にその言行不一致に疑問を感じるようになり、これに対抗するための拠り所を率先垂範の態度に求めるようになった。

その後、吉田は実家の裏山に入り山居生活を実行することになるが、これにも石川の影響が見られる。石川は1889年（明治22年）、貧しい小作人でも勤労節約に励むことで借金生活から脱却できることを示すため、あえて小作米を借りて草木谷（石川の住む村の奥の谷地）に入り、10年間の山居生活を実行し、これを証明した。吉田が三男として独立するにあたり、わざわざ山に入って自給自足しようとした理由の一つには、石川の山居生活が念頭にあったものと思われる。

このように老農の教えは吉田をはじめとする富永青年自治塾の青年に影響を与えていたが、続いてこれを時代状況に照らしながら位置づけておきたい。

吉田が石川の生き方を学んだ大正末期から昭和初期という時代は、社会経済史的には独占資本主義形成期にあたる⁽¹²⁾。この時期、独占資本がもたらす化学肥料、品種改良により農業生産力は増大したが、それに伴い農村は貨幣経済への依存度を高め、小作層の生活は困窮していった。これが決定的になったのが、1930年（昭和5年）から翌年にかけての昭和農業恐慌である。政府はこの対策として農山漁村経済更生運動を提唱し、農村の自力更生により解決を図ろうとしたが、この時参照されたのが明治期に活躍した老農であった⁽¹³⁾。昭和農業恐慌後、帝国農会が農村更生指導員のために発行したハンドブックにも、次のように記されている。

農村更生運動の歴史は決して新しいものではない。勿論名稱も今日の如き農山漁村経済更生計畫と呼ばれた譯でもなく、内容も幾分違ってはいるが斯の事業の爲に幾多の先賢が輩出し、計り知れぬ苦心努力が拂はれ、今日の経済更生事業の素地を作り、好事例を貽して居られる事を忘却することはできない。

明治、大正年間を通じて町村更生に取つて忘れ得ない開拓者は、前田正名、石川理紀之助兩氏である [帝國農會 1935、p. 395]

勤勉、貯蓄により自力更生を目指すという老農の精神は、農村に危機が訪れるたびに官民双方から参照され、再評価がなされていた。これは昭和戦前期においても同様で、富永青年自治塾をはじめとする地方農村青年の生き方の指針となっていたのである。別の言い方をすれば、老農の精神は資本主義の矛盾を農村の内部で処理するためのイデオロギーとして機能していたともいえる。

2) 帰農思想

吉田は1925年(大正14年)、秋田市で帰農生活を送る社会運動家、鈴木木人の兄弟愛農場を訪問して教えを受けている。鈴木木人(1896-1976)、本名真洲雄は、秋田で最初の消費組合、医療組合を設立した人物として知られている。鈴木は教員の息子として生まれ、自らも教員をしながら宗教や哲学を探求していたが、「存在より生活への転向⁽¹⁴⁾」を経て帰農し、同志2名とともに秋田市に兄弟愛道場を拓いた。そこで鈴木は晴耕雨読の開墾生活を送りながら、時に訪ねて来る若者とともに語り、労働した。道場のある一日を鈴木は次のように記している。

雨の中を奮闘して七人の青年が肥料や道場の材料を運搬して下された。女の友は梨の袋や箱に紙を貼って下された。若い男女の感激の生活に私は生きたい。一番嫌いなのは一人前の積りで小さく固まった向上心も努力も精進もない男でも女でも犬でも植物でもそうだ、大きくなろう、大きくなろうとしてニイチェもトルストイをも乗り越えて進むような気概の生活者を慕はしく思ふ [渡部 1991、p. 127]

男鹿から秋田まで出向いて教えを乞うた吉田も、こうした向上心のある青年の一人だとみなされていたということになる。

先の引用でニーチェとトルストイの名が出てきたが、この名は当時の日本の思想状況を象徴的に示しているため、これを端緒に時代状況を整理しておきたい。吉田が鈴木のもとを訪ねた大正末期はいわゆる大正生命主義⁽¹⁵⁾ 全盛の時代でもあった。近代合理主義やそれがもたらす機械文明に対する反動として、神秘的なものや自然への回帰がもてはやされたが、その思想的根拠となったのが、ニーチェやベルグソンの生の哲学⁽¹⁶⁾ と、トルストイやクロボトキンのアナーキズム的な帰農思想であった。なかでも後者が青年知識人に与えた影響は大きく、日本各地で彼の影響を受けた「トルストイヤン」が発生した。鈴木の事績をまとめた渡部勇吉も次のように評している。

秋田には文学青年が多く、また米の産地でもあるから、階級闘争の始まる頃まで、トルストイヤンなる者が非常に多かった。これら一派は凡て芸術的な傾向を多分に持ち、人道主義的で、また一面宗教的でもあった。何よりも著しい特徴は、「土に親しむ」ということで、自分で耕して自分で食えぬくせに皆百姓の真似事をしていた [渡部 1991、p. 178]

帰農は当時の青年知識人にとって、「心になかった正しい生活⁽¹⁷⁾」を実現するための手段となっていたのである。

鈴木が兄弟愛道場を拓くにあたり直接的な範としたのは、江渡狄嶺の百性愛農場(1911)である。江渡は東京帝国大学の卒業を放棄し、徳富蘆花の世話によって武蔵野に土地を得て、同志の協力を得ながら百姓生活を実践していた。なお江渡に先駆すること4年、徳富自身も百姓生活を始めているが、自らを「美的百姓」と卑下するように、本格的なものではなかった。

トルストイの帰農思想は徳富以外にも、白樺派をはじめとする多くの文学者へ影響を与えている。帰農の実践にまで至った例としては、武者小路実篤の新しき村(1918)があり、また帰農とは異なるが、自らの農地を小作人に解放した例として、有島武郎の狩太農場の解放(1922)がある。なお鈴木は有島を秋田に迎えて講演会の場を設けており、交流の跡が窺える。このほかにも同時代の帰農事例として、石川三四郎の土民生活(1927)が挙げられる。石川は平民社同人として出発し、田中正造に師事。大逆事件を契機にヨーロッパへ亡命し、帰国後江渡と同じく武蔵野の地で帰

農している。石川のアナーキズム思想は、同時代の若者に大きな影響を与えた。

以上概観した通り、大正後期には帰農思想が流行しており、思想と生活との一致を求める一部の知識人は実際に帰農を実行した。こうした試みの多くは必ずしも成功の裡に終わったとは言えず、また知識人の自己満足でしかないという批判も多く寄せられたが、興味深いのは、吉田のような地方農村青年の共感を一定程度獲得していたことである。一部の地方農村青年の眼には、自らの百姓生活を肯定し、思想的な根拠与えてくれるものとして映っていたのかもしれない。

3) 農民自治主義

吉田は1926年(大正15年)、武蔵野の大西伍一宅「森の家」で開催された農民自治会の夏期講習に参加した。農民自治会とは、都会文化を否定し、農村文化の高調を目指した全国組織であり、その綱領は、①農耕土地の自治的社会化、②生産消費の組合的経営、③農村文化の自治的建設、④非政党的自治制の実現であった。吉田が参加した夏期講習はこの理念の普及啓発を目的としたもので、その講師及び演題は同会の雑誌『農自』に以下の通り告知された。

石川三四郎「近世社会運動と農民」／下中弥三郎「農村教育の再建」／伊福部隆輝「重農主義文芸論」／江渡狄嶺「農業倉庫について」／堀井梁歩「産業組合について」／中西伊之助「労働組合論」／新居格「虚無思想と農民」／犬田卯「土の芸術」／室伏高信「土の哲学」／加藤一夫「農村問題」[大井1980、p.177]

当時の問題関心を概観できて興味深い。この夏期講習を目的として全国各地から集まった農村青年20余名は、講師とともに6日間寝食を共にしながら交流を深めた。吉田はこの講座をきっかけとして大西伍一、岡本利吉と関係してゆくことになるが、これらについては後節で改めて述べるとして、ここでは同時代的な社会運動について概観し、農民自治主義の立ち位置を整理しておきたい。

農民自治会の発足に先駆けること3年前、1922年(大正11年)にはキリスト教社会主義者の賀川豊彦、杉山元治郎らによって日本農民組合が組織され、小作争議を指導しながら無産政党の結成に向けて活動していた。また時を同じくして、社会主義者の堺利彦、山川均らにより、非合法政党である日本共産党が生まれている。これらの組織は内部対立や弾圧により様々な方向に分裂・展開してゆくが、共通しているのは、政治的な闘争により農民、労働者の立場を向上させようとする姿勢である。これに対して農民自治会は、教員組合啓明会をその源流としていることもあり⁽¹⁸⁾、教育的・文化的な組織行動で農民の生活を向上させようとした点に特徴がある。同会長野県連合の中心人物である竹内罔衛は当時の農民自治会の立場を次のように記している。

農民自治会は、かのブルジョア階級がその余命を一日でも長からしめんために投げ与へた普通選挙に随喜し若しくは逆用を策して躍起になってゐる、腹黒やお人善し連の無産政党を有害無益と見る。(中略)人々は目を丸くして、これ「アナ系の農民運動」「農村サンジカ」「農民組合に対抗するもの」などと批評とりどり、或は会心の笑みを、或はひそかに恐れる向きがある [大井1980、p.110]

農民自治会はアナーキズムの点で帰農思想と共鳴しながらも、より組織的な社会変革を目指す点に特徴があったといえる。吉田をはじめとする一部の志高い農村青年は、中央でこうした思想に接して感化され、それぞれの地方に戻って農民自治の実現を模索したのであった。

4) 農村塾風教育とデンマーク農業

吉田は1927年(昭和2年)、富士山麓に開かれた農村青年共働学校の一期生として入学し⁽¹⁹⁾、岡本利吉の教えを受けている。岡本利吉(1885-1963)は社会運動家・思想家で、農村と全人類の生活安定を目指し、農村中堅人物の養成や、世界共通語ポアーボムの開発を行なった人物である。著作に『規範経済学』(1928)や『農村問題總會決』(1931)があり、当時の農村青年に大きな影響を与えた。その岡本が開校した農村青年共働学校の概要は次の通りである。

学校には全国から、一期二カ月、32名~50名を集め、合宿し、半日は農耕、半日は講義により(農業・畜産・果樹・蔬菜・育種・土壌・肥料・病害虫・変異等)勉学して居た。(中略)午前五時……全員起床/日の出時……(天明の自己確認)のち朝食/午前中……講義/午後……作業、実習/夜……討論会、座談会

日課は厳しく、食生活は一汁一菜、一食は薩摩芋であった。当時の農村は疲弊のどん底で、学生は志高く粗食に甘んじ、必死に何かを掴んで帰ろうと求めた。学校はデンマーク式農法を中心に、新しい知識と理念それに開墾による自立農業を模索したのである[岩崎1992、p.18]⁽²⁰⁾

その教育理念は記録としては残っていないが、校舎前に整列して暁天に斉唱したとされる「天明時の自己確認」は、次のような言葉で始まり、終わっている。

遠く限りない大自然の姿をそのまま我等気持とする偉大なる人生の今日も一日を迎える事でありませす。(中略)純美純愛純真の普遍意識に迄我等わ全人類と共に自己を完成し、大自然の美観の中に永久不滅の精神体を確認し獲得しましよ[岩崎1992、p.21]

精神主義的な色彩も強いが、総長には後の文部大臣、平生夙三郎を据えており、また外部講師としては法政大学の小野武夫、日本農民組合の賀川豊彦らが名を連ねている。当時、こうした学校が社会的に認知されていたことが窺える。

同時代的にみると、このような農村塾風教育は日本全国で試みられていた。代表的なものだけでも、宮沢賢治の羅須地人協会(1926)、加藤完治の日本国民高等学校(1927)、杉山元治郎の日本農民福音学校(1927)、内村鑑三と新渡戸稲造の興農学園(1929)など、枚挙に暇がない。小野は『最近農業問題十講』(1936)の中で、「最近農村塾風教育の動向」と題してこれを論じ、その特徴として、①其教育精神が宗教的なること、②勤労精神が重要視せらるること、③塾頭並びに教師と塾生との間に於ける人格的接近の濃密なることの3点を挙げている。岡本の農村青年共働学校もこれらの特徴を完全に満たしており、当時の農村塾風教育の典型と見ることができる。

もう一点、同時代状況として言及すべき事柄として、デンマーク農業への注目が挙げられる。デンマークは国土が狭く小農が多い点で日本と似ているにも関わらず、敗戦と農業危機を乗り越えて農業立国として栄えていた。この原動力となったのが穀物生産と酪農を組み合わせた「多角形農業」であり、全国に根付いた消費協同組合と農業協同組合の精神であり、農村青年の実生活に役立つ教育を行なう国民高等学校(フォルケホイスコレ)であった。農村疲弊に仰ぐ当時の日本にとって、デンマークは理想の国の代名詞となっており、多角形農業と協同組合が上手く機能していた愛知県碧海郡は「日本デンマーク」と呼ばれ、また国民高等学校でおこなわれていた体操は「デンマーク体操」の名で輸入されて流行を博した。先に挙げた農村塾風教育も、その多くがデンマークの国民高等学校を範としている。

吉田をはじめとする地方農村青年は、こうした環境下で新たな農業思想を学び、実践し、農村中堅人物となっていった。

5) 小作争議

吉田は1927年（昭和2年）以降、居住地周辺の小作争議に参加し、農民組合運動のリーダー泉甚治郎からマルクス主義を学んでいる。泉甚治郎（生没不明）は元小学校教員で、1927年（昭和2年）に八郎潟沿岸で発生した長根の小作争議に際して、男鹿農民組合を組織した人物である。以後農民運動の中心人物として活動するも、1937年（昭和12年）に検挙され、再起不能の状態にされた。吉田は裏山で山居生活をはじめて以降、何度か官憲に追われる泉をかくまっておき⁽²¹⁾、吉田もまた要注意人物とみなされていた。吉田が保谷へ引っ越した直後に男鹿で一斉検挙があり、吉田は辛くも取り調べを免れている⁽²²⁾。

昭和初期は全国的に見ると小作争議の第二次高揚期にあたる。この時期は東北を中心に発生しており、特に秋田は1934年（昭和9年）の487回をピークに度々全国一位を記録している。この背景には様々な要因が考えられるが、ここでは直接的な発生原因について見てゆくほか、プロレタリア文学、そして恐慌と冷害という観点から整理しておきたい。

昭和初期の小作争議の目的は、小作料の減免要求のほか、耕作権の継続要求いわゆる立禁撤回を求めるものが多かった。吉田が参加した長根の小作争議も、地主が無断で別の小作に耕作権を転売したことが原因となって発生している。小作は土地の所有者ではないとはいえ、強制的に耕作権を剥奪されてしまえば生きていくことができない。このような先例を許してはならないとして、泉が中心となり男鹿農民組合が結成され、日本農民組合の指導の下、八郎潟湖岸の村々を巻き込んで争議を起こした。100名近くの警官が路上で警戒にあたる中、八郎潟対岸の農民は湖上を船で横断して合流、結果として総勢2000名近くの農民が参加し、耕作権継続の要求を通した⁽²³⁾。

官憲の陸路／農民の船路という構図が象徴的なこの小作争議は、プロレタリア作家の金子洋文により『赤い湖』（1930）として小説化されている。金子洋文（1893-1985）は秋田県出身の小説家で、若い頃は武者小路実篤に師事していた。その後社会主義思想に傾倒し、1921年（大正10年）、同級生の小牧近江、今野賢三らとともに雑誌『種播く人』を創刊した。本雑誌は日本プロレタリア文学の出発点となるもので、これが男鹿からそう遠くない秋田県土崎港町⁽²⁴⁾で発刊されている。これ以降、昭和初期にかけてプロレタリア文学・農民文学が隆盛を迎えるのであり、代表的なものとして、葉山嘉樹『海に生きる人々』（1926）、黒島伝治『豚群』（1926）、小林多喜二『不在地主』（1929）、秋田の農村を描いたものとして、伊藤永之介『湖畔の村』（1939）などがある。吉田をはじめとする地方農村青年は、自らの生活が文学の対象となるのを横目に見ながら田畑を耕し、また労働者として出稼ぎに従事していたことになる。

秋田の小作争議件数は1928年（昭和3年）から1942（昭和17年）まで、年間100件を超え続けるが、その背景として農業恐慌と冷害があったことも考慮しなければならない。1929年（昭和4年）の世界恐慌を受け、生糸をはじめとする農産物価格が急落、翌年は豊作も相まって米価が急落した。1931年（昭和6年）は一転して東北は冷害に見舞われて大凶作となり、農村の生活は困窮した。また1934年（昭和9年）も冷害に見舞われており、この年が先に述べた小作争議発生件数全国一位（秋田県487回）の年にあたる。地方農村青年はこうした生活苦を解消するための一つの方法として、小作争議に参加していったのである。ただし吉田三郎について言えば、少々状況は異なる。吉田は1929年（昭和4年）に県内の篤農家に弟子入りして半促成蔬菜栽培を学び、翌年実家の裏山で山居生活を開始している。つまり、水稻単作地帯秋田の中であって畑で商品作物を作るこ

とで、結果として昭和農業恐慌の直接的な被害を免れているのである。吉田の『手記』（1933年執筆）と『日録』（1935-1936年執筆）はこうした状況下で書かれたものであり、その意味では、古くから続いてきた地域の生活を記録したものではない。

6) 生活綴方運動

吉田をはじめとするアチックの農村青年は地元の生活を詳細に記録したが、これらは同時代的にはどのように位置づけられるのか。関連しそうな動向を整理しておきたい。

大正デモクラシーがもたらした自由主義的な思潮は教育にも影響を及ぼしていた。大正から昭和初期にかけては、従来の注入主義的な教育を改め、より自由な発想で子供や青年の可能性を伸ばそうとする動きが活発化しており、その一つに生活綴方運動があった。この先駆となったのが芦田恵之助の教育易行道である。芦田恵之助（1873-1951）は明治から昭和にかけて活躍した国語教育者で、随意選題による綴方教育を提唱した。また晩年の1942年（昭和17年）以降は保谷の民族学博物館内にある民家、武蔵野の家で生活を送った。吉田は保谷の管理人時代に芦田と同じ敷地内で暮らしたことになり、その思想にも影響を受けている⁽²⁵⁾。ここでは芦田が綴方教育で目指そうとしたものを示すため、その著書『国語教育易行道』（1935）から一節を引用しておく。

綴方によつて、自己を育てようといふ人の姿を、日記を書く人の上に見たいと思ひます。日記とは日々にかかる千變萬化の出来事の中に、自己のたしかに生きたと信じ、過つたと思ふことをそのまゝに記して、反省の資とするものです。（中略）若し人が日記を書くことによつて、自分の生活が文藝作品の素材たり得る者と悟り、常に之を注視して、道にかなふを喜び、道に反するを悲しむやうになりますれば、綴方による教育は、これによつて完了したといつてもよいかと思ひます〔芦田1935、p. 288〕

芦田が主著となる『綴り方教授』を発表したのが1913年（大正2年）であり、その5年後には鈴木三重吉が全国規模の児童文芸雑誌、『赤い鳥』（1918-1936）を創刊している。鈴木は児童が純真無垢な心の赴くままに生活を綴ることの有効性を提示し、またその芸術性を説いた。

一方、1829年（昭和4年）には秋田で成田忠久が北方教育社を立ち上げ、北国の厳しい現実に根差した、より実践的な現実把握を目指した綴方教育を提唱している。同社の雑誌『北方教育』に掲載された事例を紹介したい。

きてき 南秋・金足小・尋四・伊藤重治

あの汽笛／田んぼに聞えただらう／もう／あば（母）が帰るよ／八重三 泣くなよ

[佐々木1932、p. 8]

恐慌に喘ぐ東北農村の生活を活写した児童詩として名高い作品である。生活綴方運動は様々な方向に展開したが、北方教育社のように現実の問題を直視する方向に進んだ場合、児童に階級闘争意識を植え付けることを目的とした、プロレタリア綴方といったカテゴリも生み出した。

アチックの地方農村青年による生活記録がなされたのは1930年代後半、時代的には生活綴方運動の影響を受けていても不思議ではないが、直接的な言及は見いだせない。仮にアチックの生活記録をこの運動の中に位置づけるならば、イデオロギー性が希薄だという意味において、プロレタリア綴方運動の対極にあるものとみることができる。

7) 農村教育研究会と郷土調査

学校教育の場を離れ、農村を対象とした教育の確立を目指したものとして、1927年（昭和2年）に大西伍一が主宰した農村教育研究会がある。大西伍一（1898-1992）は明治から昭和にかけて活躍した農村教育家で、戦前は農村教育研究会のほか、教育者団体啓明会、農民自治会に参加している。1933年（昭和8年）からは大日本連合青年団郷土資料陳列所主任、アチック・ミュージアム研究員も務めた。アチックでは水産史研究室の一員として漁民伝の編纂を担当している。吉田に生活記録を作成するよう勧めた人物であり、自身の著作としては『土の教育』（1926）や『日本老農伝』（1933）などがある。大西をはじめとする農村教育研究会は、機関誌の発行や講習会の開催を通じて、農村社会の実態に即した教育を確立すべきことを説き、その具体的な方法の一つとして、教育者が自らの地域を調査して郷土読本を編纂することを提案した。同会には小田内通敏、小野武夫、小出満二といった地理学・農政学の研究者も参加しており、農村生活の科学的な把握が目指されていたことが窺える。その後、農村教育研究会の理念は郷土教育連盟（1930）、教育科学研究会（1937）へと継承され、発展していった。

またこの時代、郷土調査は青年団活動としても推奨されるようになる。大西が主任を務めた大日本連合青年団郷土資料陳列所では、1937年（昭和12年）に『郷土調査の仕方 附、参考書』を発行しており、そこでは郷土調査の目的や問題設定の仕方、具体的な研究方法などが解説されている。興味深いのは、調査には「診察のための調査⁽²⁶⁾」と「理解のための調査⁽²⁷⁾」があり、そのいずれもが推奨されていることである。前者は「農村経済更生計画の参考となるやうな資料を蒐める⁽²⁸⁾」もので、後者は「たゞ興味を以て郷土生活各方面の實際を明らかにする⁽²⁹⁾」ものだとされる。付属の参考書一覧は、地理・社会経済・民俗・民話・年中行事・民家・服飾・自然界・其他に分類され、数冊ずつ示されている。民俗のものとしては、柳田國男の『郷土生活の研究法』（1935）に加え、田中喜多美『山村民俗誌』（1933）、竹内利美編『小学生の調べたる上伊那郡川島村郷土誌』（1934）、吉田三郎『男鹿寒風山麓農民手記』（1935）といった実例も挙げられている。同時代的に見た時、アチックの地方農村青年の手による生活記録は、郷土調査の一例としてみなされていたことがわかる。

吉田に『手記』を書くよう勧めたのが大西であり、青年団による郷土調査を推奨したのも大西であること、そしてその大西は、かつて農村教育を主導し、農民自治を目指していたことを確認しておきたい。吉田をはじめとする地方農村青年はこうして新たな教育の対象となり、その結果、一部の意識ある青年は郷土調査を実践していったのである。

8) 博物館

郷土への関心が高まる中で、「各郷土に即した庶民階級の生活資料⁽³⁰⁾」を蒐集する博物館が日本各地で発生してくるが、全国規模で資料を収集・展示した最初の博物館として、大日本連合青年団郷土資料陳列所と保谷の民族学博物館がある。前者は1934年（昭和9年）に大日本連合青年団の創立10周年事業として開館したもので、後者は1939年（昭和14年）に日本民族学会付属の博物館として開館したものである。本章ではこの両施設の特徴を収蔵資料から検討し、また昭和戦前期という時期にこれらが開館することになった時代背景について整理しておきたい。

両施設はそれぞれ何を蒐集しようとしたのか。これを考えるにあたり手がかりとなるのが吉田三郎の寄贈資料である。本共同研究の調査を通じて、吉田が同時期にそれぞれの施設に対して資料を寄贈していることが明らかになったため⁽³¹⁾、これを比較してみたい（表1、2）。大日本連合青年団郷土資料陳列所の方に資料が寄贈されたのは1933年（昭和8年）で、大西が吉田に『手記』を書

表1 郷土資料陳列所

資料名	寄贈年
みのけむしろ	1934
おえむしろ	1934
冠布	1934
えづめ	1934
しと（藁製敷物）	1934
つづれこ	1934
しねこもつべ	1934
わらはばき	1934
足半草履	1934
あくとまき	1934
馬の口な	1934
馬の口ふご	1934
馬沓	1934
ふご	1934

出典：日本青年新聞
資料提供：丸山泰明

表2 民族学博物館

資料名	現地名	寄贈年
サンゴウバラ箸		1934
山袴	タモツペ	1934
帯	ミヒョウオビ	1934
足半草履	アシナカゾーリ	1934
はんでん	ミヂカハンテン	1934
たらのきぼう（小正月用）	タラノキボー	1935
脛巾	ハンマキ（半巻）	1935
藁皿	エビスザラ	1935
藁皿	エビスザラ	1935
藁皿	エビスザラ	1935
腕貫手甲		1935
鋏	クワダイ・鋏台	1935
かかとあて（藁製）	アグドマキ	1935
出刃包丁（なまはげ用）	出刃包丁	1935
輪（うさぎ狩猟用）	兎ワ	1935
箒	ワラボーキ	1935
ナマハゲの面		1938
ナマハゲの面		1938
槽（木製）	キチ・kitsi	1938
筥	エビドー	1938

出典：国立民族学博物館資料カード
資料提供：国立民族学博物館

くよう勤めた時に蒐集したものと推定される。この時大西は同所主任として、郷土資料蒐集を目的とした東北一周の旅をしており、その一環で吉田宅を訪ねていた。この時寄贈された資料は14点で、日常生活に用いる衣服や履物の類がその大半を占めている。蒐集者の大西はどのような理念に基づいてこれらの資料を選定したのか。これを考えるためには大西の次のような言葉が参考になる。

日本民族の生活の跡を、この風土に即してはつきりと眼に見せてくれる陳列施設がこの際ぜひなければならぬと思ひます。（中略）日本精神は日本人的な生活を離れては無く、日本人的な生活は、日本人的な生活資料を離れては無いと思ひます。例えば蓑笠・草履・下駄・背負袋・もんぺ、はてはゐろりや住宅の形式に至るまで、これらの物は即ち日本人の生活を語り、日本精神を實証するに足る資料なのです。[日本博物館協会 1936、p. 2]

すなわち日本精神の象徴としての生活資料が求められており、そのため、形は違えども日本全国で日常的に使われているものが蒐集の対象になったのである。この意味は、保谷の民族学博物館への寄贈された資料と比較することでより鮮明になる。

民族学博物館の方に資料が寄贈されたのは1934年（昭和9年）から1938年（昭和13年）にかけてで、アチック一行が『手記』および『日録』の出版にあたり、吉田宅を訪問した時に蒐集したものと推定される。寄贈された資料は20点で、「たらのきぼう（小正月用）」や「出刃包丁（なまはげ用）」など、年中行事に用いるものや地域的な特色のあるものが目立つ。これらは、『手記』および『日録』の文章を補完、実証する実物資料として蒐集されたため、結

果として、日本民族の生活ではなく、男鹿寒風山麓の生活を象徴する資料群になった。アチック農村青年による生活記録の舞台は、北は幌別、南は喜界島まで、農・山・漁村と様々であるが、そこで蒐集された資料も千差万別で単純な比較を許すようなものではない。したがって、少なくとも生活記録関連の蒐集資料に関して言えば、アチック一行の目線は日本精神などではなく、各々の地域の生活に留まっていたといえる。

ただしその一方で、吉田の民族学博物館寄贈資料の中には「足中草履」、「筓」、「山袴」もあることに言及しておかねばならない。これらは当時アチックの民具部会や宮本勢助がおこなっていた、同一資料の全国規模での比較研究という文脈で理解されるべきものである。その意味では、郷土資料陳列所と民族学博物館は同じ時代背景の中で生まれ、同じ方向を目指していたという見方もできる⁽³²⁾。

昭和戦前期にこうした施設が求められた理由を考えるにあたって、皇紀2600年記念事業の一環として構想された、日本民族博物館構想についてみておきたい。日本民族博物館構想は外務省管轄の財団法人、国際文化振興会が主導した計画であり、これには渋沢も深く関与していた。その「設立趣意書」には民族博物館の同時代的な意義が先鋭的に示されているため、ここに引用しておきたい。

最近に於ける国連の躍進と国家内外の情勢とは独り国防の方面に於いてのみならず、文化的施設の領域に於きましても急速に充実整備を要するものが頓にその数を増し、いづれもその実施促進の問題に直面しているのであります。(中略) 思ふに一国文化の現状を国民に徹底せしめ、進んで之を世界に理解せしめるには先ずその由って来る所をしらしめねばならず、又従来のごとく上層少数者の文化に偏倚するの弊を一洗し、国民大衆無名の人々の生活を如実に教へる所がなければなりません。[丸山2013、p.203]

この分野について詳細な研究を著している丸山の言葉を借りるならば、「ソフト・パワー外交」が昭和戦前期にも課題になっていたのであり、それを体現する施設が日本民族の生活を展示する施設だったということになる。ただし内部的には、こうした論理がある意味ではお題目に過ぎなかったことも確認しておきたい。渋沢は日本民族博物館構想が挫折したのち、日本民族学会の附属施設として保谷の民族学博物館を建設するが、その建設理由は、アチックで蒐集した資料が自邸では保管しきれないほどの量になっていたことと、空襲を警戒して資料を疎開させたかったことにあった⁽³³⁾。

こうした国家主義体制の影響下にあつて、地方農村青年は郷土を発見し、それを象徴する資料を大日本連合青年団の郷土資料陳列所に寄贈していったのである。

4. まとめ——社会的・思想的立場の布置——

地方農村青年の一人、吉田三郎の活動遍歴を起点として、戦前の地方農村青年をとりまいていた思想的・社会的状況について概観してきた。吉田が影響を受けたキーワードを時系列に沿ってたどると、老農の精神、帰農思想、農民自治主義、農村塾風教育とデンマーク農業、小作争議、生活綴方運動、農村教育研究会と郷土調査、博物館となっており、これはマクロ的に見ると、大正デモクラシーから農本主義が生まれ、それが挫折あるいは過激化し国家主義に合流してゆく、という近現代史の流れを一人で体現しているようにも見える。その意味で吉田は、戦前の地方農村青年をとり

まいていた思想的・社会的状況を具体的に捉えるうえで最適な人物である。

続いてもう少しミクロな視点で見ると、これらのキーワードは、必ずしも単線的に理解すべきではないことがわかる。大正から昭和初期にかけては、様々な思想的・社会的立場が乱立した時代であり、吉田はこれらの立場を自由に組み合わせ、自らの生き方の指針とした。試みにこれを2つの座標軸からなる平面の中に落とし込んでゆくと、おおよそ次の通りになる(図1)。

横軸は「農本主義—マルクス主義」であり、これらは反資本主義という点では一致していながらも、細部では対立関係にあった。農本主義が都市と農村の格差を問題とし、農村文化の高調を目指したのに対し、マルクス主義は資本家(地主)と労働者(小作)の格差を問題とし、地主的土地所有の改善、打破を目指した。本稿に登場したキーワードで言えば、日本共産党、小作争議、プロレタリア文学、吉田の書き物「所謂アゴについて」と「我田引水」以外はすべて農本主義寄りの立場である。

縦軸は「政治的—文化的」であり、これは「行動的—内省的」という言い方もできる。つまりところ、政治的手段による直接的な変革を目指すか、文化的手段による間接的な変革を目指すかという対立である。本稿に登場したキーワードで言えば、日本農民組合や日本共産党、小作争議が前者の最たるものであり、帰農思想や郷土調査、博物館が後者の最たるものである。

このように整理してみると、地方農村青年吉田三郎は、基本的には農本主義かつ文化的な立場に身を置いていたことがわかる。吉田の書き物は農本主義的なものからマルクス主義的なものまで多岐に亘るが、大西、渋沢の助言のもとで記された『手記』と『日録』は、そのどちらにも属していない。これらは地域の伝承や生活の忠実な記録でしかなく、そこからは思想的なイデオロギーが読み取れないからである。この傾向は、吉田以外のアチック農村青年が記した生活記録にも共通している。思想と学問の距離が遠い現代からするとこれは当然かもしれないが、本稿で概観した通り、様々な思想的・社会的立場が渦巻いていた昭和戦前期という時代に、これらの記録がなされたという事実は強調されてよい。

翻って、アチックはなぜ水産史研究を行なったのかという問いに、本稿の立場から答えるならば、昭和戦前期、農の方面は良くも悪くも騒がしかったからだ、ということになる。つまりこの当時、思想的・社会的立場と切り離して農業を論ずることは難しかった。もちろんこの回答は、なぜ水産史研究をしたかではなく、なぜ農業史研究ではなかったのかに対する仮説でしかないが、アチックの同時代的な布置を捉えようとする際には、一考を要する視点だと考える。

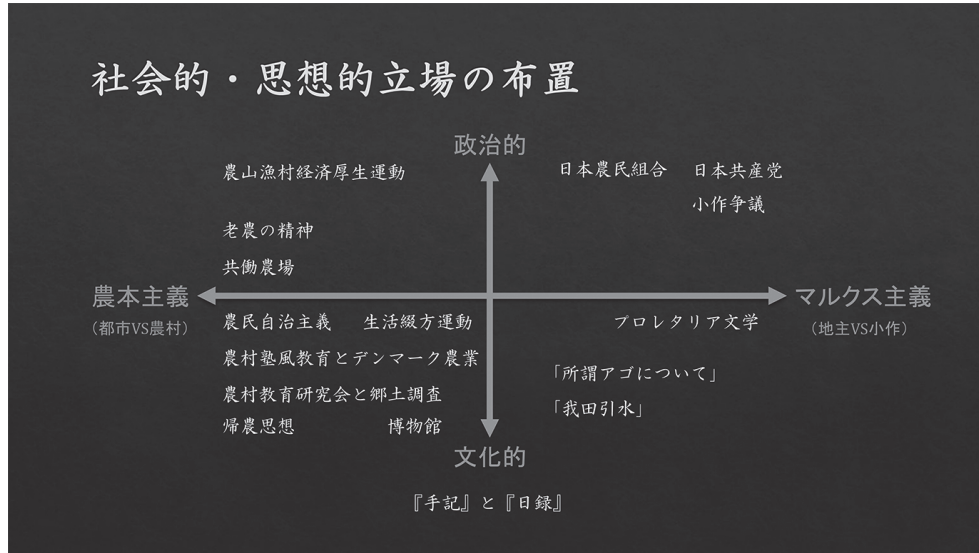
結論を述べよう。地方農村青年による生活記録は、イデオロギー性に乏しいという意味において、同時代的には良くも悪くも大きな意味を持たなかった。それでも、いやだからこそ渋沢は、これを記すよう勧め、出版したのである。本稿の結びとして、吉田が『日録』を作成するにあたり渋沢から受け取った手紙の一節を引用したい⁽³⁴⁾。この手紙に、渋沢の生活記録に対する考えが端的に示されていると思うからである。

貴兄の今回企てられた仕事は 日本の農業的又社会的 更にせまくしては民族学的に見て全く最初のものであり 画期的の仕事であり 現代並に後代の学者識者人の極めて有意義な思考の根柢を與へるものであり 更に貴兄自身にとっても人格の完成の上に他の何物にも勝る仕事だと思ふからであります。

之が成功したあかつきに於て、我國民の將來の爲に之がどんなに意義のある仕事となるでせうか、ハダナハナバナシイ仕事ではありません、貴兄の仕事は東京の識者から絶大の感謝を受けることでせう。是非ともこの仕事に成功して頂き度いと思います。[渋沢 1935、p. 1-2]

渋沢は、地方農村青年の手による具体的な生活記録が、学問にとって、当事者にとって、そして国民の将来にとって重要な意味を持つようになる想定していたのである。

図1 社会的・思想的立場の布置



【吉田三郎 年譜】

吉田三郎（1905～1979）、秋田県脇本村富永大倉出身。七人兄弟の三男として生まれる。地元富永大倉の勉強熱心な気風も手伝い、幼少期より自己研鑽に励む。

青年期は村の自主組織「富永青年自治塾」の中心人物として活動しながら、中央の思想家、活動家と積極的に関わりながら思索と実践に励んだ。こうした活動が農村教育家、大西伍一の目に留まり、『男鹿寒風山麓農民手記』として結実した。その後渋沢敬三の依頼を受け、山居生活の一年間を詳細に綴った『男鹿寒風山麓農民日録』を執筆する。

戦中は渋沢敬三に招かれ、保谷の民族学博物館にて管理人となる。宮本馨太郎のもとで地方から送られてくる民具の整理等に従事しつつ、博物館敷地内の畑で野菜栽培をおこなった。保谷に移住してからはアチックの一員として『アチック・マンズリー』に度々寄稿するとともに、実録小説『我田引水』も執筆した。

戦後は自らの思想を体現すべく、同志を集め、秋田県天王村にて入植開拓に従事した。秋田へ戻ってからも渋沢敬三との関わりは続き、生涯で6冊の単著を記した。常に農民として耕作しつつ、自らの思索を深めては発言する「もの言う百姓」であった。

西暦	和暦	年齢 (数え年)	年譜
1925	大正 14	21	富永青年自治塾の講師、渡部英から鈴木木人の兄弟愛農場を紹介され、訪問して教えを受ける
1926	昭和 1	22	武蔵野で開催された農民自治会の夏期講習に参加し、下中弥三郎、大西伍一らの講義を受ける
1927	2	23	静岡県富士山麓の農村青年共働学校に入学し、岡本利吉の教えを受ける
1928	3	24	農民運動のリーダー泉甚治郎からマルクス学を学ぶ。この時期、組合運動にも参加
1929	4	25	秋田県館合村の篤農家、伊藤長治郎のもとで半速成野菜栽培技術を取得
1930	5	26	実家の裏山に土地を借り山居生活。半速成野菜栽培農業を始める
1931	6	27	
1932	7	28	
1933	8	29	大西伍一の勧めを受け地域の民俗記録にかかる。『男鹿寒風山麓農民手記』脱稿。渋沢敬三、石黒忠篤ほか7名来村
1934	9	30	
1935	10	31	『男鹿寒風山麓農民手記』出版。出版祝賀会にて渋沢敬三より日録の作成を依頼される
1936	11	32	『男鹿寒風山麓農民日録』脱稿。アチックマンズリーに「ナマハゲの晩」寄稿
1937	12	33	民族学博物館管理人として保谷村へ移住。アチックマンズリーに「所謂アゴについて」を寄稿し、内浦漁民資料に言及
1938	13	34	『男鹿寒風山麓農民日録』出版。アチックマンズリーに「農事失敗談」ほか4編寄稿
1939	14	35	

西暦	和暦	年齢 (数え年)	年譜
1940	昭和 15	36	
1941	16	37	実録小説「我田引水」を短歌雑誌『博物』に連載（全12回）
1942	17	38	日本農業研究所農場助手訓練生係、日本生活学院農場指導を兼務
1943	18	39	渋沢邸の庭園を自給畑に開墾し、指導する
1944	19	40	民族研究講座全課程を修了
1945	20	41	渋沢敬三、石黒忠篤の後援により秋田県天王村に開拓地を確保、入植
1946	21	42	追分西開拓農事実行委員会を組織し組合長となる。渋沢敬三来村
1947	22	43	
1948	23	44	秋田県開拓者連盟初代委員長、秋田県開拓農業協同組合連合会理事等を兼務
1949	24	45	渋沢敬三来村
1950	25	46	追分小学校建設実行副委員長
1951	26	47	天王町農業委員
1952	27	48	渋沢敬三来村
1953	28	49	
1954	29	50	
1955	30	51	石黒忠篤来村
1956	31	52	
1957	32	53	
1958	33	54	「地方に於ける農具の変遷」寄稿（『日本の民具』所収）
1959	34	55	
1960	35	56	
1961	36	57	
1962	37	58	
1963	38	59	『もの言う百姓』出版

注

- （1）本稿で地方農村青年という時の「農村」は、都市に対立する概念として用いており、必ずしも農業に従事していたことを意味しない。本稿では、都市から離れた場所で第一次産業に従事していた若者のことを、地方農村青年と呼ぶ。
- （2）吉田の生家のご子孫によれば、吉田の父は果樹にも興味をもち、家の裏手の小高い丘で梨を作っていたという。吉田の妹はこの見張番をし、吉田の兄の妻とともに峠を越えた船川の港町へ売りに行った。また吉田の父は菓子屋も営んでおり、進取の気風に富んでいたことが伺える。なお、吉田の生家の屋号は今でも「カシヤ」である。
- （3）吉田が特に苦勞したこととして、言うことを聞かない暴れ馬の対処と、旱魃による水引き（灌漑）争いを挙げているが、これらは共に明治農法の普及が遠因となっている。つまり、近代馬耕の導入とそれに伴う農地の乾田化が、暴れ馬の対処と水引き争いという新たな問題を生み出したのである。特に吉田家は馬喰に恵まれず、何度も暴れ馬を買わされたため、家計の大きな負担となった。また乾田化以前の富永大倉の田は基本的に湛水田であり、排水には苦勞しても灌漑で苦勞することは少なかった。
- （4）吉田三郎の妻、カツエは収穫した野菜を背負って峠を越え、時には鉄道男鹿線のトンネルの中を歩いて通り抜け、隣の港町、船川で売り歩いた。その苦勞は並々ならぬものであったと吉田のご息女は回想している。
- （5）『男鹿寒風山麓農民日録』には、吉田自身の生活のみならず、吉田の実家の生活も記されているが、これは吉田が半促成蔬菜栽培で生計を立てていたことによると思われる。つまり生業面でいえば、吉田の畑作経営は当時の男鹿寒風山麓の村の一般的な生活ではなかった。それゆえ吉田は毎日実家に降りて行き、実家の稲作の様子を聞き取り、これも記録したのである。
- （6）地方農村青年の中でも吉田三郎、進藤松司、拵嘉一郎の3人は、渋沢から上京して力になってくれないかと誘われており、吉田と拵はその後実際に上京して渋沢の近くで働いている。
- （7）各地から送られてくる民具を前にして、所員とともにその用途を議論する際には、「百姓の道具は百姓が一番よく知っている」と言って一歩も引かなかったと、ご息女は回想している。
- （8）この昼食会のご息女にとっても楽しみの一つであった。特に高橋文太郎の妻がふるまったカレーやシチューといったハイカラな食事は強く記憶に残っているという。
- （9）アチックは民具研究部、漁業史研究部、文献索引編纂室、運動部などといった大小さまざまな部会に分かれて活動していたが、それぞれの活動を把握できる場が『アチックマンズリー』であったといえる。また渋沢は、部会の枠を越えた研究も目指しており、これは宮本馨太郎の日記の次のような記述から窺える。「一月十五日（月曜日）晴天（中略）今夜は吉例の新年打ち合わせ会である。澁沢先生より内浦漁民史料に見えたる民具につ

- き今年の研究して貰いたいと云はれる。終わって民族学博物館の今後について相談さる」[宮本 1940、p. 15]。残念ながらその後、内浦民具の研究は実現しなかったが、櫻田や山口といった漁業史研究室の所員が調査先で民具を収集しており、個々のレベルでは多少気にかけていたことが窺える。
- (10) 小説が短歌の雑誌に掲載された背景には、三郎の弟、吉田四郎の力添えがあったものと思料される。四郎は短歌をはじめとする文芸一般に秀でており、雑誌『博物』の常連歌人であった。また、四郎も自伝的小説『煙突掃除の日記』(1941)を發表している。
- (11) 特に開拓初期の苦労は大きく、その片鱗は吉田四郎のご息子が所持する当時の「組合會議録」(1948-1950)からも窺うことができる。また四郎はこの開拓初期の共働農場を舞台とした実録小説を執筆したが、不幸にしてその原稿は出版に至る前に消失した。
- (12) 武田共治は日本農本主義の歴史的を次の5期に区分して整理している。1. 徳川封建体制動揺・崩壊期、2. 資本の原始蓄積期、3. 産業資本確立期、4. 独占資本主義体制期、5. 国家独占資本主義体制期。なお石川理紀之助は2から3の時期に該当する。
- (13) 桜井武雄は当時の農山漁村経済更生計画に日本の精神主義を見出して次のように述べている。「農村経済更生五カ年計画は(中略)明治初期から中期にかけて盛行したところの老農主義の再版とみてまちがいない。この農村更生運動の中堅人物を養成するために全国十二カ所に設置されると云ふ農民道場とは、いはゞ老農精神の復活鍛錬場であり、老農的人士の養成所に外ならない」[桜井 1947、p. 33]
- (14) この言葉は帰農前の鈴木が好んで用いており、1919年(大正8年)の秋田魁新報に掲載された記事にも次のような一節がある。「今や存在より生活への流転の曙光を現実の生活に認め得ようと煩悶する者の、漸く日に多きを加へつつある事は生存の意義よりして、人間の価値よりして喜ぶべき現象と言わねばならぬ。而してこの存在より生活への転向乃至は流転の神髓を考察する準備にはかなりの苦悶、極言すれば生への闘争への準備に自己を拡張、乃至は有意義の破壊を断行せねばならぬ」[渡部 1991、p. 108]。この記事を發表して4年後の1923年、鈴木自身も教員を辞め、帰農の道に進んだ。
- (15) 大正生命主義の全体像については、鈴木貞美の一連の研究が詳しい。
- (16) 生の哲学とは、狭義には、「体験としての生」から出発し、生の直接的な把握を目指す哲学であるが、広義には、生活との結びつきを強調する実践哲学や、人生観の確立を目指すような処生哲学も含まれる。大正期にあっては、これらの思想が様々なレベルに応じて受容された。
- (17) トルストイの著作『光あるうち光の中を歩め』より引用。[トルストイ著・原訳 1952、p. 13]。当時の日本で流行したトルストイは、回心して原始キリスト教的な帰農生活を送るようになって以降のトルストイ、いわゆる後期トルストイであった。この時期の作品は民話的、宗教的、道徳的、社会批判的な色彩が強く、代表作としては、『イワンのばか』(1885)、『人生論』(1887)、『光あるうち光の中を歩め』(1890)、『復活』(1899)などがある。『復活』は1914年(大正3年)に日本で劇化されており、その劇中歌「カチューシャの唄」が大流行したことからも、日本におけるトルストイ受容の一端が垣間見える。
- (18) 松田 1997 に詳しい。
- (19) 卒業名簿によれば、吉田が卒業した翌年、二期生として同郷の佐藤鉄五郎が卒業している。おそらく吉田が郷里に戻り、その有意義なることを説いて回ったのだと推測される。
- (20) 同校の園長を務めた岩崎万里のご子孫が整理した資料による。なおこの資料は、同校について調査している長谷川博氏からご提供いただいた。心より御礼申し上げます。
- (21) ご息女のお回想による。彼女は当時まだ6歳に満たないが、幼い時期の記憶が驚くほど確かである。なお吉田の回顧録に登場する、「記憶の良い子であった。一度メーデーの「さけ万国の労働者」の歌を歌ってきかせたら、それを覚え込んでいた。そして妻が物売りに出て昼近く帰るころになれば、妻が歩いてくる道の見える高いところに立って、手を振りながら、メーデーの歌を歌って迎えるという、いじらしい子供」[吉田 1963、p. 74]が彼女である。
- (22) 吉田のご親族によれば、渋沢が吉田を東京に呼び寄せたのは、思想問題で検挙されるのと、戦争により徴兵されるのを防ぐためだったとされる。吉田自身も渋沢の政治力を頼みにしているふしがあり、叔父が思想問題で捕まった際に釈放してもらえるよう働きかけたり、甥を渋沢邸の書生にしてもらえないか頼んだりしている。
- (23) 今野 1954 に詳しい。
- (24) 土崎港は雄物川の河口に位置する港で、日本海を隔てた先にはロシアがある。『種播く人』発刊の4年前、1917年(大正6年)にはロシア革命が勃発しており、雑誌中にもロシア革命救援を訴える「飢ゑたるロシアの為に」などの投稿がある。当時社会主義者の目がロシアを向いていたことを考えると、秋田の土崎でプロレタリア文学運動が生まれたことは象徴的である。
- (25) 吉田の恩師である渡部英の記述による。[吉田 1977、序文]
- (26) 郷土資料陳列所 1937、p. 80
- (27) 同上

- (28) 同上
- (29) 同上
- (30) 日本博物館協会 1936、p. 2
- (31) 大日本連合青年団郷土資料陳列所の資料リストは、国際常民文化研究機構の共同研究「昭和戦前期の青年層における民俗学の受容・活用についての研究」の調査成果である。情報提供および活用をお許しいただいた研究代表者の丸山泰明氏、共同研究者の黛友明氏に心より御礼申し上げる。
- (32) 事実、両施設間では相互に人的、資料的交流があった。吉田や大西のみならず、渋沢敬三、今和次郎、宮本勢助、村上清文、進藤松司などが両施設に関与しており、双方の理念に大きな乖離はなかったことが窺える。両施設の詳細については、丸山 2013 が詳しい。
- (33) 渋沢敬三のご子息の回想による。[西東京市・高橋文太郎の軌跡を偲ぶ会 2010、p. 13]
- (34) この手紙は吉田三郎のご親族が保管されていたものである。本共同研究の調査にあたり、初めて公開していただいた。心より御礼申し上げる。

引用・参考文献

- 秋田近代史研究会編 1969『近代秋田の歴史と民衆』秋田近代史研究会
- 秋田県農民運動史刊行委員会編 1990『秋田県農民運動史』秋田県農民運動史刊行委員会
- 芦田恵之助 1935『國語教育易行道』同志同行社
- 飯沼二郎 1964『地主王政の構造』未來社
- 石川理紀之助 1976『明治大正農政経済名著集⑭ 適産調要録 老農晩耕録 石川理紀之助作成による諸規定など』農山漁村文化協会
- 岩崎正弥 1997『農本思想の社会史—生活と国体の交錯』京都大学学術出版会
- 岩崎更一 1992『昭和初期の葛山資料』（私家版）
- 大井隆男 1980『農民自治運動史—転換期の青春群像—』銀河書房
- 大串隆吉 1984『生活記録運動の歴史的研究—プロレタリア文学運動から生活記録運動へ—』『人文学報. 教育学』19号
- 大西伍一 1926『土の教育』平凡社
- 大西伍一 1936「大日本聯合青年團 郷土資料陳列所」『博物館研究』第九卷第四號
- 大西伍一 1985『改定増補 日本老農伝』農山漁村文化協会
- 岡本利吉 1929『規範經濟學』平凡社
- 岡本利吉 1931『農村問題總解決』純眞社
- 金子洋文 1976『金子洋文作品集（一）』筑摩書房
- 金子洋文 1976『金子洋文作品集（二）』筑摩書房
- 川上富三 1996『板木のひびき—石川理紀之助翁伝—』潟上市教育委員会
- 郷土資料陳列所 1937「郷土調査の仕方 附、参考書」『青年教育時報』第九号
- 国立民族学博物館編 2013『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏の博物館 ATTIC MUSEUM』国立民族学博物館
- 小林千枝子 1983「大西伍一—の思想と実践—1920年代の日本社会に生きた—教師の研究—」『教育学研究』第50巻第4号
- 近藤雅樹編 2001『図説 大正昭和くらしの博物館誌 民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミュージアム』河出書房新社
- 今野賢三 1954『秋田縣勞農運動史』秋田県勞農運動史刊行会
- 桜井武雄 1974『日本農本主義』青史社
- 佐賀郁郎 2003『受難の昭和農民文学—伊藤永之介と丸山義二、和田伝』日本經濟評論社
- 佐々木昂 1932「菊地知勇氏の文藝運動と綴方教育」『北方教育』第8號
- 渋沢敬三 1935「『日録の意義』（仮題）」（個人蔵）
- 渋沢敬三 1937「園長養成（仮題）」（個人蔵）
- 下中邦彦 1971『哲学事典』平凡社
- 鈴木貞美 2015『近代の超克—その戦前・戦中・戦後—』
- 武田共治 1999『日本農本主義の構造』創風社
- 帝國農會 1935『指導必携 農村經濟寶典』帝國農會
- トルストイ、原久一郎訳 1952『光あるうち光の中を歩め』新潮社
- トルストイ、藤沼貴訳 2014『復活（上）（下）』岩波書店

- 西東京市・高橋文太郎の軌跡を学ぶ会編 2010『渋沢敬三・高橋文太郎と民族学博物館—保谷にあった日本初の野外展示をもつ民族学博物館—』萩原企画
- 日本作文の会編 1962『北方教育の遺産』百合出版
- 日本常民文化研究所編 1958『日本の民具』角川書店
- 日本常民文化研究所編 1972『日本生活資料叢書 第9巻』三一書房
- 沼津市明治資料館編 2000『興農学園—みかん村とデンマーク教育—』沼津市明治資料館
- 野本京子 1999『戦前期ベザンティズムの系譜—農本主義の再検討—』日本経済評論社
- 東敏雄 1987『勤労農民の経営と国家主義運動—昭和初期農本主義の社会的基盤—』御茶の水書房
- 久野収、鶴見俊輔 1956『現代日本の思想—その五つの渦—』岩波書店
- 北条常久 1992『種蒔く人』研究—秋田の同人を中心として—』桜楓社
- 松田千枝子 1997「教育的「自治」概念の成立と展開：農村社会における教育・文化運動を中心に」(博士論文)
- 丸山泰明 2013『渋沢敬三と今和二郎 博物館的想像力の近代』青弓社
- 宮本馨太郎 1940「宮本馨太郎日記」(一般財団法人 宮本記念財団蔵)
- 宮本馨太郎 1985『民俗博物館論考』慶友社
- 宮本常一 1978『日本民俗文化大系(3) 澁澤敬三』講談社
- 吉田三郎 1935『アチックミュージアム彙報第4 男鹿寒風山麓農民手記』アチックミュージアム
- 吉田三郎 1938『アチックミュージアム彙報第16 男鹿寒風山麓農民日録』アチックミュージアム
- 吉田三郎 1963『もの言う百姓』慶友社
- 吉田三郎 1964『男鹿風土誌』秋田文化出版社
- 吉田三郎 1971『男鹿寒風山麓方言民俗誌』秋田文化出版社
- 吉田三郎 1977『男鹿のこぼれだね』秋田文化出版社
- 渡部勇吉 1991『生協の先駆者 鈴木真洲雄』無明舎出版